

## 観光地内の周遊行動分析及び交通システムの検討に関する研究

北見工業大学大学院 学生会員 ○佐々木智哉  
 北見工業大学 正会員 高橋 清  
 北海道開発局 白戸 義孝

## 1. はじめに

近年、旅行スタイルは観光客のニーズの多様化・個性化に伴い、従来の団体旅行客中心から、個人旅行客中心へと移行してきている。本研究のケーススタディである阿寒湖温泉街においても例外ではなく、個人でレンタカーやマイカーでドライブしながらの観光ニーズが高まってきているところである。そこで、新たな観光ニーズに対応するため、街の賑わいや快適な歩行空間の創出を目的とした社会実験が行われた。

社会実験の成果を阿寒湖温泉街全体として総合的に検証するため、個人旅行客を対象とした詳細な周遊行動を把握することは重要である。観光客の行動を分析するにあたって、時間と空間の制約から周遊行動を表現出来るアクティビティ・ベイスト・アプローチ（以下ABAとする）を用いることは有効である。

そこで本研究では、阿寒湖温泉街における観光客の周遊行動について、ABAを用いた分析を行うことを通して、観光地内における交通システムの検討を目的とする。

## 2. 社会実験概要及び調査概要

平成18年8月11日～10月15日に、阿寒湖温泉街の賑わいや快適な歩行空間の創出を目的とした以下のような社会実験が行われた。

- ・温泉街内のメイン通りを一方通行にし、かつ蛇行させるボンネルフの実施
- ・温泉街の駐車場と商店街を結ぶ無料循環バスの運行
- ・温泉街の道路を活用したオープンカフェの設置

そこで、阿寒湖温泉街の観光客の周遊行動及び社会実験の満足度、問題点を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。概要を表-1に示す。

表-1 アンケート調査概要

|      |                                                  |
|------|--------------------------------------------------|
| 調査日程 | 平成18年9月14日(木)～17日(日)                             |
| 調査形式 | ヒアリング形式                                          |
| 調査対象 | 実験期間中、阿寒湖温泉街に訪れた観光客                              |
| 回収票数 | ・周遊行動:383票 ・ボンネルフ:286票<br>・循環バス:56票 ・オープンカフェ:55票 |

## 3. 周遊行動の調査結果

## 3.1 阿寒湖温泉街の現状

阿寒湖温泉街の観光スポットは、まりもの里商店街を中心とする湖畔東部と、幸運の森商店街を中心とする西部の2地域に大別される(図-1)。しかし、2つの地域の上に位置する観光スポットが無いことから相互の人の行き来が少ないのが現状である。

また、大規模な駐車場が国道沿いに整備されているにもかかわらず、観光客が温泉街に自動車を乗り入れ

ることにより路上駐車が慢性化している。さらに、メイン通りの歩道は狭く段差や凹凸があり、徒歩で回遊しようとする観光客にとっては快適性が低いといえる。

阿寒湖温泉街は以上のような問題点や新たな観光形態への対応が遅れているため、現在では観光入込み客数は最大約180万人/年(平成10年)から約140万人/年(平成17年)へと減少している。



図-1 阿寒湖温泉街概要図

## 3.2 周遊パターンの分析

調査結果から観光客の周遊パターンは前述の理由から、(1)幸運の森商店街を中心に周遊(以下Aパターン)、(2)まりもの里商店街を中心に周遊(以下Bパターン)、(3)阿寒湖温泉街全体を周遊(以下Cパターン)の3つに分類される。

各周遊パターンにおける周遊時間及び滞在箇所の関係を比較した(図-2,3)。全体の平均周遊時間は110.1分、平均滞在施設数は2.48箇所であった。A、Bパターンの周遊時間及び滞在施設数が少ないのは、阿寒湖温泉街を道東観光の一つの中継地点として短時間滞在し、その後別の観光地へ出発していく観光客が多いためと考えられる。そのため、阿寒湖温泉街だけで長時間滞在できるような施設(例えば食事が取れる施設)を設置するような施策が必要であると考えられる。

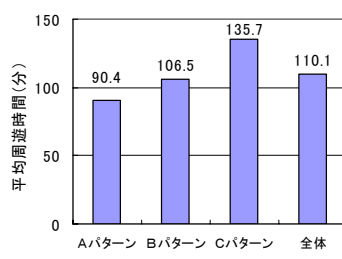


図-2 平均周遊時間

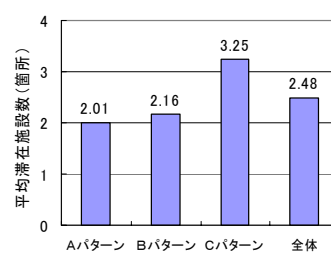


図-3 平均滞在施設数

キーワード アクティビティ・ベイスト・アプローチ、観光地内周遊行動、社会実験  
 連絡先 〒090-8507 北海道北見市公園町165番地 TEL 0157-26-9526

#### 4. ABAを用いた周遊行動分析

##### 4. 1 滞在施設数の増加可能性に関する分析

ABA は、一日の活動（アクティビティ）と交通（トリップ）の連結状態に着目し、時間・空間・活動の 3 要素を相互依存関係として活動を分析する手法である。

図-4 は実際の観光客の周遊行動を時空間プリズム上に表したもので、縦軸に周遊時間を、横軸に都市平面を表し、傾きは移動速度の逆数である。

図-4 では、「湖岸駐車場」から「A エリア」を周遊し、その後『徒歩』で「B エリア」に移動し、「湖岸駐車場」に戻って来たという平均的な観光客のパターンを表している。ここで、「A エリア」から「B エリア」までの移動を『徒歩』で行った場合に要する時間は 20 分である。仮に、『循環バス』を利用して移動を行った場合は 6 分となり、『徒歩』と比較して 14 分の移動時間を短縮することが可能になる。従って、短縮された 14 分を活動時間にあてることができ、例えば、調査結果より「オープンカフェ」の平均利用時間が 12.5 分であったことから、短縮された時間を一時休息的な理由としてオープンカフェの利用も考えられる。

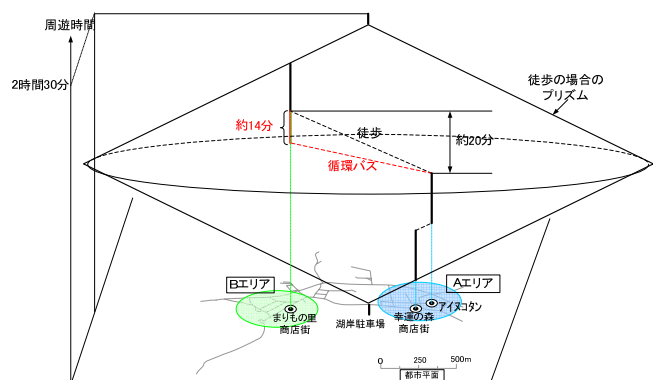


図-4 周遊行動の時空間プリズム 1

##### 4. 2 周遊時間の増加可能性に関する分析

調査結果より、午前中に来訪する日帰り客のほとんどが昼食の時間帯である 12:00~12:59 の間に阿寒湖温泉街を出発していることがわかる（図-5）。

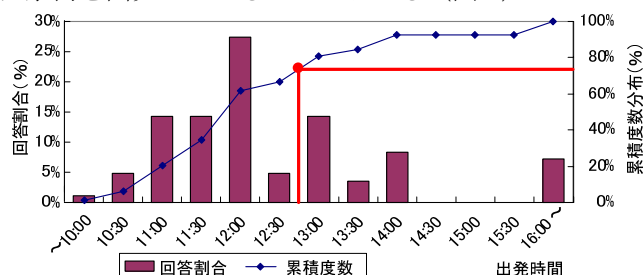


図-5 午前中に来訪した観光客の出発時間

ここで、A, B エリア間に昼食を取れるような施設を設置した場合、午前中にしか滞在していなかった観光客が昼食をとるため滞在時間の延長が考えられる（図-6）。さらに、分断されていたエリア間に観光スポットが出来ることで繋がりがもたらされ、阿寒湖温泉街全体を周遊しやすくなることが予想される。

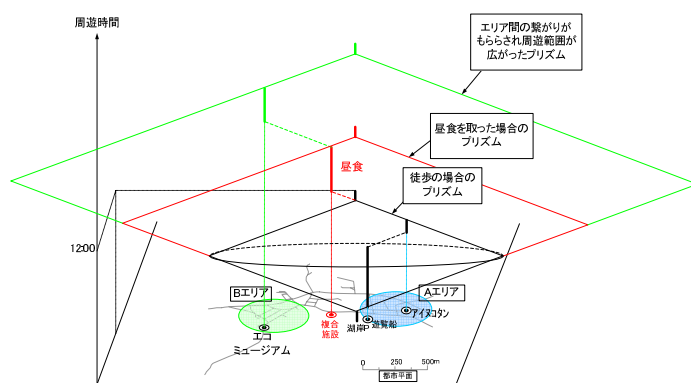


図-6 周遊行動の時空間プリズム 2

#### 5. 交通システムの検討

社会実験の満足度調査より、循環バスに対する満足度は高い結果となった（図-7）。これは、既存の駐車場と温泉街の観光施設の周遊性を向上させるのに重要な役割を果たしたと考えられる。特に、大きく 2 箇所に分かれている温泉街の観光スポットを循環バスで結ぶことで移動時間が短縮され、時間が限定されている観光客の、各観光スポットの滞在時間を延ばすことができたことを評価されている。また、これまで徒歩のみで周遊していた観光客は、より広範囲な行動を可能にするものであるといえる。

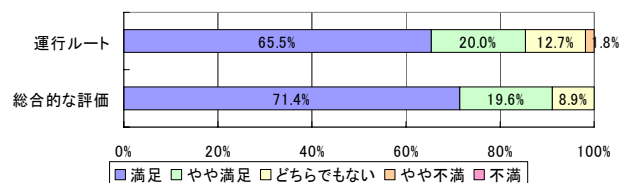


図-7 循環バスの満足度

また、ボンエルフの満足度を見ると、安全性と魅力度共に高い評価を受けている（図-8）。これは、一方通行にしたことにより自動車交通量や、路上駐車が減少したため、歩行者にとっての安全性が増し、魅力的に温泉街を散策出来る環境が整ったと考えられ、観光客の回遊性の向上に寄与したといえる。

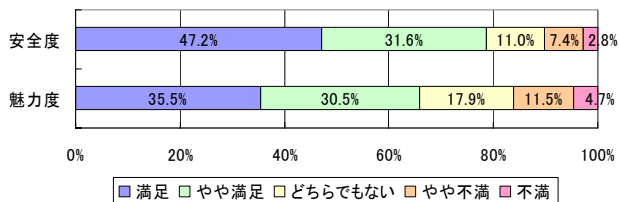


図-8 ボンエルフの安全度、魅力度

#### 6. おわりに

本研究はABAを用いて、周遊時間が変化しない場合及び周遊時間を大きくする場合の 2 つの視点から周遊行動を分析し、周遊行動が広がる可能性を示した。さらに、阿寒湖温泉街で行われた社会実験に対する周遊行動の影響を検討した結果、観光客が長時間、かつ多くの施設に滞在することで街の賑わいに繋がると考えられる。